連載 第5回

人生の失敗

ゲスト 城内実さん（前衆議院議員）

「郵政民営化法案の中身を知ってしまった以上、賛成はできませんでした」

昨年夏、小泉首相は郵政民営化法案の是非を問う解散総選挙に打って出た。
「刺客」「くのいち」などとメディアが小泉劇場を煽るなか、「造反議員」とされた候補の多くが落選。
首相の出身派閥・森派で法案に唯一反対した城内実さんも、その一人だ。
熱狂から約1年、小泉内閣が終焉を迎えるいま、あのときの決断について、城内さんに語ってもらった。

取材・文 溝口敦 ジャーナリスト

「一発で受かったのは最初の衆院選ぐらいで、あとは平均すれば1勝2敗の人生です」

去年の今ごろは郵政民営化法案で大騒ぎだった。衆院の本会議ではわずか5票差で可決されたが、青票（反対票）が予想外に多く、小泉純一郎首相のお膝元、森派からも一人だけだが造反議員が出た。静岡7区（浜松市など）選出の城内実議員（41歳）である。

城内さんは採決直前まで本会議場で安倍晋三幹事長代理（当時）から賛成に回るよう説得を受けた。その映像は繰り返しテレビ放映されたから、城内さんはよほど頑固者と誤解した向きが多いかもしれない。

今の社会ではまれなことに、骨があることはたしかである。だが、決して肩肘張った武骨者ではなく、人当たりもよく、考え方も柔軟である。筆者は城内さんと初対面だが、話を聞いているうち「出たい人より出したい人を、というのは城内さんのことか」と思ったほどだ。彼は「革新的な保守主義」の人で、構想や施策の全部にはついていけないが、少なくとも世のため人のためを考えていることは分かる。

ご承知の通り、参院本会議で郵政民営化法案は否決された。小泉純一郎首相は即日、衆院を「郵政解散」した。民営化法案に反対した37人の議員は自民党の公認候補者としないと発表し、結局、城内さんは公認から外されて無所属で戦うハメになった。差し向けられた刺客は舛添要一参院議員の元妻で、元財務省主計官の片山さつき（現衆院議員）だった。

9月の総選挙で城内さんはわずか700票差で片山さつきに敗れ、議席を失った。その後、自主的に自民党を離党、現在は再選を期し、選挙区で雌伏の日々である。

城内さんの失敗には裏も表もない。彼は郵政改革法案に反対したことだけで落選した。法案は城内さんの政治信念からは許せないものであり、譲ることのできない一線だった。なぜ反対なのかはおいおい聞いていくが、敗れたりとはいえ「男を通した」のが城内さんだろう。

彼は今、静岡7区の選挙区（浜松市）で家賃6万円の一戸建てを借りて住む。妻と、小学1年、幼稚園の男児が2人。後援会再結成のため毎日歩いているせいか、日焼けし、体は引き締まっている。後援者のオフィスを借りて事務所とし、スタッフがボランティアを含めて3人いる。収入の途は通信制高校の非常勤講師で、浜松にある学習センターに月何回か通い、今年4月からは拓殖大学の客員教授にも就いた。

父親の赴任先ドイツで過ごした幼少時代。

事務所に城内さんを訪ね、2階のがらんとした会議室でインタビューした。まず彼自身の生い立ちから話し始める。

城内　昭和40年4月生まれなんですけど、実は3歳まで広島におりました。父親が広島県警の捜査2課長をやってまして、当時は『仁義なき戦い』のころ。暴力団同士が激しく争っていた。そのため母親は東京で私を出産し、数ヵ月東京で過ごしてから広島に戻りました。

4歳からは東京ですが、1971年から4年半、父がドイツ大使館に出向しました。私は小学1年から4年までボンの小学校で過ごします。74年に今年と同様、ワールドカップがドイツであって、私も当時サッカー少年でサッカーをやってました。

城内さんの実父、城内康光氏は警察庁長官までつとめた元警察官僚である。今は引退し、横浜に住んでいる。

城内　ドイツから戻って父親が着任したのが兵庫県警の刑事部長でした。私は神戸の小学校に4年で入って、初めて日本の教育を受け、日本語に苦労しました。要するに漢字が書けない。教科書をちゃんと読めないから、さすがに焦って、朝早く起き、漢字を練習したもんです。一番勉強した時期かもしれない。

ボンには日本語の補習校があったが、城内さんは勉強好きでなく、通わなかったという。父親の教育方針は「ドイツ人の中で揉まれろ」だった。高級官僚の家庭としては質実剛健である。中学も横浜の公立中学だった。高校は進学校の開成高校に進み、1年浪人して東大教養学部に入った。

城内　よく「これまで順風満帆で来ているから、落選していい勉強になっただろう」といわれますけど、私は中学受験、高校受験、大学受験、外務省の試験など、通算4勝8敗ぐらいの成績です。とうてい順風満帆とはいえない。

私が初めて一発で受かったのが03年11月の衆院選でした。大学も浪人したし、外務省も2回受けて、最初落ちた。平均すれば1勝2敗の人生ですから、去年の選挙で落ちたのも帳尻が合ってるのかもしれない。失敗慣れはよくないと思いますけど、一度、二度失敗したって何とかなるさという感じですね。

頼もしい。失敗や挫折の体験者には親しみ

きうち・みのる

1965年、東京都生まれ。広島、ドイツ、兵庫、神奈川など少年時代を父親の赴任先で過ごす（父の康光さんは第15代警察庁長官でギリシャ大使などを務めた）。大学卒業後、外務省に入省、1990年から在ドイツ日本大使館に勤務。2002年、外務省を退官。翌年の衆議院選挙に静岡7区から無所属で出馬し当選、自民党に入党する。昨年、衆院本会議で郵政民営化法案に反対票を投じ、その後の選挙で無所属で出馬するも僅差で落選。現在、地元の高校での非常勤講師や拓殖大学で客員教授を務めながら、次の選挙へ向けて活動を続ける。右上写真は、昨年の選挙戦で毎日のように演説をした交差点に立つ城内さん。

が持てるし、安心もできる。89年に東大教養学部の国際関係論分科を卒業して外務省に入省。子供時代、ドイツにいた経験と言葉を生かして国際的な仕事がしたい、日本の国益の最前線に立ちたいと思ったのが志望動機である。

城内　要するに外国に行って、日本の国益のため切った張ったの交渉がしたかった。子供のころと外務省時代を合わせると、約10年弱ドイツで過ごしてます。今41歳ですから、自分の人生の4分の1が海外です。政治家としても、いい経験になったと思いますね。

外国で見えるのは、たとえば日本のテレビのこと。非常に子供じみたというか、くだらない番組が多い。外国にはあまりない非常に低次元の番組を、よくぞ公共の電波を使って流しているなと思います。それは今でも変わらず、逆にどんどんひどくなっている。レベルが国際標準に比べ突出して低いんです。私はテレビのせいで日本人がどんどん幼稚化しているんじゃないかと思ってます。だから小泉劇場みたいなものに完全にひっかかってしまう。

父親は私にテレビを見せなかった。大分長い間、家にはテレビがなかった。テレビがないほうが、かえって世の中のことがわかるんじゃないかと最近思って、私も、今、家にはテレビを置いてない。子供には見せてないんです。

城内さんのテレビ観には賛成できる。見るに耐えないアホ番組というか、見るだけでアホが感染りそうな番組が視聴率アップを旗印にまかり通っている。

妻に内緒で外務省を退官、無所属で選挙に出馬。

城内　外務省では残念なことに田中眞紀子大臣と鈴木宗男さんのお茶の間をにぎわすような事件がありました。真剣に、外務省の若手の1人として省内を改革しようと思っても、なかなかうまくいかなかった。外務省の幹部も改革するポーズだけに終わったような気がするし、本当に外務省を改革する気なんて、なかったのかもしれない。

「外務省をやめたよって妻に突然言ったら、実家に帰ってしまい大変でした（笑）」

02年11月、城内さんは外務省を退官し、03年11月総選挙への出馬に備える。外務省に嫌気が差し、政治家に転向したのか。

城内　田中眞紀子外相就任後、鈴木宗男さんとのごたごたがあって、川口大臣に替わって、やれ、外務省改革だという中で右往左往する先輩方の姿を見て、何となく、こんなことでいいのかな、と。これは、そもそも日本の政治が悪いからではないかと強く感じました。

よく私を政界に引き入れたのは安倍晋三先生だと言われますが――もちろん安倍先生にはお世話になりましたが――直接のきっかけはそうではないんです。当時の静岡県の自民党県連会長・原田昇左右先生が日独議員連盟の幹事長をしていて、たまたま麻布のドイツ大使公邸でお会いしたとき、「おまえ、おやじが浜松だろう」と言われた。

当時、第9選挙区と言っていたんですけど、その後、1つ減って7区になった。「7区の自民党の支部長が最近亡くなった。おまえ、選挙に出ないか」と。何、いきなり言ってるのかなと驚いて、その場では、「いや、私なんて」とお断りした。それが今から4年前の9月です。

右上／1歳のころの城内さん。
左／ドイツで暮していた小学校3年生のとき。一緒に映っているのは祖父、父、姉。
右下／高校生のころの城内さん（自宅の庭で）。
写真提供は城内さん（以下、クレジット表記のない写真は全て城内さん提供）。

そのまま話は消えたと思ったんですが、たまたま議員会館に仕事で行ったら、また原田先生にお会いして、「あの話、どうなった。返事がないぞ。応援するから出たらどうだ」と言われた。それでちょっと真剣に考えました。

だけど、両親は大反対。妻も、当時、子供が2歳と1歳、「いや、そんなのやめて」と。私も妻にはちゃんと相談しないで外務省をやめてしまったので、今でも覚えてますけど、「きょう、外務省やめたよ」と言ったら、絶句して、実家に帰って、もうこんな人についていけないからと、大変でした(笑)。やっぱり、こういう大事なことを決めるときは、妻とよく相談したほうがいいと勉強しました。

城内さんがその年12月、出馬を前提に自民党第7選挙区支部長になった直後、7区での対立候補、民主党・熊谷弘議員が保守新党の党首になった。自民党は保守新党と連立を組むため、城内さんに東海比例の1位にするから、選挙区での出馬を見合わせるよう指示があった。だが、城内さんは無所属で出馬して熊谷氏に競り勝つ。晴れて衆院議員になり、自民党に戻った。が、今回の「郵政解散」で再び無所属を強いられ、落選。わずか1年9カ月の国会議員だった。

しかし城内さんは最初の選挙で勝利した。それが1つの自信になって、今回も無所属で勝てると考えたのではないか。

城内　私は2回とも無所属の選挙しかやったことがないわけで、やって見ると、無所属でも何とかなるだろうという気持ちはありました。ただ、今回は1回目のときと違って逆風です。郵政民営化に対する抵抗勢力といったレッテルを張られ、党からの応援もない。もちろん無所属だから党からの公認料もない。最初の選挙もそうでしたが。兵糧攻めに遭ったようなものです。逆風の中での選挙だったわけです。

城内さんの郵政改革反対理由は明確だし、正論と思う。政治は妥協の世界だろうが、決して妥協してはいけない問題もある。

城内　私は、自分で言うのも何ですけど、要領は悪いし、不器用かもしれないけど、清濁併せのまないかというと、そうでもないと思ってます。やっぱり、譲るところは譲らなきゃいけない。ただし郵政民営化法案は、私の良心というか、私の心の許容範囲をはるかに超える悪い中身、そして非民主的な手続きだったので、これは反対しないとならんと思ったんです。最後まで悩みました。賛成したら楽だろう。自分の保身を考えれば、賛成したほうがいいに決まっているわけです。

にもかかわらず、どういう理由で反対に回ったのか。

城内　たまたま郵政の勉強会をやろうと、1年上の先輩から誘われた。私は外務省出身で、外交とか農業、林業関係、環境のほうに力を入れていて、加えて郵政では頭がパンクしちゃうとお断りしたんですけど、とにかくそういう郵政の勉強会があるから出てくれと言われて出て、何か、話が違うなという感じがした。郵政の勉強をしなければ、多分躊躇なく、私も賛成票を投じたと思う。森派ですし。勉強する前は、民営化すればいいじゃないのと。郵政族でも何でもありませんから。

城内さんは郵政族ではない。が、選挙戦の渦中では郵政族というデマも流された。

城内　民営化法案では経営形態を分社化すると。郵便事業なんて赤字に決まってます。日本の地図を見れば、7割ぐらいが山間地で、離島もいっぱいある。これで郵便事業を黒字で経営できるわけがないんです。それを支えていたのが簡保と郵貯のサービスであり、それと一体化して、全体で独立採算制と黒字で国家公務員の身分を与えていますけれども、税金を1円も使わずに何とかうまくやってきたんです。

特殊法人のむだ使いは、その金を集めて運

城内さんは「しがらみのない政治」を訴え、2003年11月の衆院選挙に出馬。当時の自民・保守新党の与党間調整の影響を受けて無所属での立候補を強いられたものの、次点に約4万票の大差をつけて当選した。写真は自民党選挙区支部長になった城内さんの応援に駆けつけた安倍晋三官房副長官(当時)。

「保身を考えれば、郵政法案に賛成したほうがいいに決まってますけど……」

用した大蔵省理財局が悪いのであって、それはほとんど廃止していますから、何も郵政をばらばらにする必要はないはずです。また簡保と郵貯とすみ分けをしている。そういう中で事業をばらばらにして、一番おいしいところだけ市場に出すと。骨と皮は残して、刺身の三枚におろして、刺身の部分をどうぞと。市場に出せば、誰も骨と皮は買わない。刺身のほうを買う。つまり資本力のある外資が買う。

城内さんは昨年6月、衆院郵政民営化特別委で当時の竹中平蔵郵政民営化相に「郵政について日本政府は米国と過去1年間に何回協議したか」と質問した。竹中氏の答弁は「17回」だった。

造反議員の「見せしめ」のターゲットに。

城内　まさに、私が一番してはいけなかった質問はそこなんです。竹中大臣は17回協議したと。17回も協議したというのは、アメリカの要求に合う形で中身をどんどん変えたということです。それは日本の国益にとってどうなのか。確かに、百歩譲って、日米安保条約で日本はアメリカに守られている、これはしようがないと言うなら、そういう議論をすればいいわけです。民営化はそのための代償なんです、と。それを「官から民へ」と国民に利益が来るかのように言っている。民営化して郵便料金が下がるとか、サービスが10倍よくなるとか、そんなことはあり得ないですよ。きっと、アメリカのように最終的には郵便事業が国営になって、税金を使って維持するか、サービスをぐっと低下させるかしかないでしょう。

上のレベルでは郵政民営化の結論は初めから決まっていたんです。これが外交文書となって30年後に出てくるのかわかりませんけれども、それに対してまじめに議論したのは、どれだけの意味があったのかと、むなしい気がします。私なんかは自民党の郵政関係合同委員会にも毎回出席して、国家国民のためになる改革はどうすればできるかと。別に、特定郵便局の方とか、あるいは郵便局の労働組合の方の立場に偏した形ではなくて、利用者、国民にとってどうしたらいいか、と。

一番いい形の改革は何かと議論して、メリット、デメリットの表などをつくってやったことは何だったのか。ほとんど、そういう論議は取り入れられていないんです。

結局は、一部の有識者と外国の方々が決めたものだったんですね。そのからくりについては、不思議と新聞やテレビは取り上げない。私の質問を取り上げたのは共産党の機関紙『赤旗』だけですね。他のメディアには黙殺されちゃう。というか、今のマスコミの人は物事の本質がわからないのかもしれません。

マスメディアの一角にぶら下がる立場としては耳が痛い話だが、事の本質が分かっていないのはその通りだろう。こだわるのは小事のみ。大局が見えていないし、見ようともしない。

城内　人権擁護法案もマスコミ人の首を締めるような法案なんですが、メディア規制条項を外すなどにとらわれ、この法案でナチスのゲシュタポみたいな巨大権限が生まれかねないことを見逃してます。

後世は城内さんを売国法案に敢然と立ち向かった男と評価するかもしれない。

城内　まさにこれは改革派対抵抗勢力じゃない。売国派対国益重視派の戦いなんです。戦いの中にいる8割ぐらいの自民党議員はこのことをわかってません。

反対票を投じたとき、どの程度、反作用を考えていたのか。

「無所属で出馬する覚悟はできてましたけど、刺客は予想できませんでした」

昨年の総選挙で郵政民営化反対を訴えて無所属で戦ったものの約700票という僅差で敗れた（右写真、提供／共同通信社）。落選後は自民党を離党。再起に向けつつ、地元の「凧揚げ祭り」に参加したり（左上、06年5月）、家族で田植えを体験する（06年6月）など、議員時代とは違う「人と人との触れ合いの時間を過ごしている」と城内さんは言う。

「強い者が勝ち続ける今の改革では、地方の生活弱者はお先真っ暗です」

城内　刺客は、ちょっと予想できなかった。解散になって無所属で出ることは十分あり得ると思ってました。今、思うと、もっとよく支援者の方に相談したほうがよかったかもしれない。相談したら「賛成しろ」と言われるに決まってますけど。やはり執行部の一部の方から見ると、私が一番最初に自民党で反対票を出した。しかも森派ですし、見せしめの一番のターゲットだったのは間違いないですね。

総理、総裁の言うことを何で聞けんのかといわれるけど、上の言うことを100％聞くのであれば、国会議員は要らないですよ。党首だけで決めればいい。そのくせ、新人候補者の方は、郵政民営化には賛成って言っても、中身がほとんどわかってない。最低30時間は勉強しないとわからないですから。

思想とは自分が損することをあえて信じ、行う行為だという説がある。この意味で、城内さんはきっちり思想と経綸（けいりん）を持った政治家といえまいか。

城内　国会議員はあくまでも手段です。自分にハクをつけるとか、後で勲章をいただくとかではなくて、やっぱり国会議員は、地域の代表、国のために仕事をするという立場です。議員年金や議員の宿舎なんて要らないと思う。電車や飛行機の無料パスも必要ないわけです。「おまえは空気の読めないやつだ」と言われました。しかし、空気を読んで、泳ぎ渡ればいいのかというと、そうじゃないと思う。空気が読めない間抜けなやつだみたいな誹謗中傷はありました。私は、そういう人とはちょっと違う価値観、国家観を持っている人間だから、空気を読んで、あっちへついたり、勝ち馬についたりはできない。

城内さんは政治屋ではない。猿は木から落ちても猿。同様に城内さんも選挙に落ちても、依然、政治家・城内である。41歳とまだ若い。落選もまた歓迎のはず。カネはなくても時間はある。当選した議員など問題にならないほど、地縁との結びつきを深められるにちがいない。

城内　今、現職じゃありませんので、基本的に地元にずっとおって、地元の方とお会いして、胸襟を開いて話をしたり、夜、1杯飲みながら食事したり。そういう意味では、支援者の方とぐっと近づいてます。最近、田植えをしました。本当に現場の人の立場に立って、――100％は立てません。専門にするわけじゃないですから。だけど疑似体験はできます――田植えを1日かけて、腰がまだ痛いんですけれども、自分の手で泥だらけになってやってみると、本当に大変だなと。

今度、夜中に起きてシラスとりの漁船に乗ってきます。乗るという体験を通して、汗水垂らして働いている方々の苦労や気持ちが何となくわかるでしょう。

乗りかかった舟である。刺客を立てられて落とされた以上、意地でも政治家をやめるわけにはいかない。

城内　政治は自分に向いているんじゃないかなと思ってます。やっぱり自分の信念とか国家観、ビジョンというのはありますので。

私の信念は簡単な物差しなんですよ。日本の国益にプラスかマイナスかという物差し、2つ目は、日本の国民にとっていいか悪いか。それですべての法案とか政策とかを判断するわけです。2つ目の国民にとってというとき、今の国民だけではなくて、将来の国民のことも考えなければいけない。と同時に、私は保守的な人間ですから、過去の国民が築き上げてきたいいものはきちんと守りながら行かなきゃいけないと思ってます。

政治家の信念はこうあるべきだろう。人より偉くなりたい、目立ちたい、威張りたい、金儲けしたいという手合いが多すぎる。議員は今や信用下落産業である。

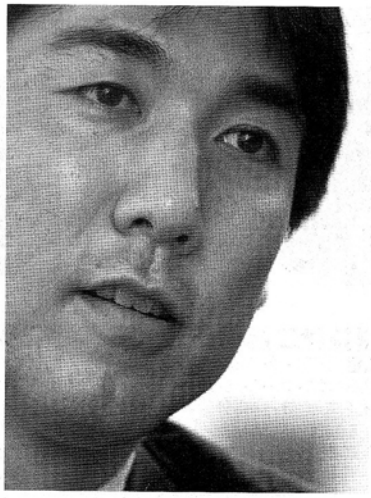
城内　やはり人権擁護法案にしても、郵政民営化の関連諸法案にしても、あるいはこれからの医療改革にしても、大丈夫かなと。いわゆる共謀罪も、大丈夫かなとか、もう本当に、どうなっているのかなという感じがします。

戦後、日本は戦争に負けて経済大国になった。いいことではあるでしょう。しかし今回のライブドアや村上ファンドにしてもそうですけど、お金だけがすべて、勝ち組、負け組とか、非常にナンセンスな現象が起きていて、そして政治家がエコノミストになっちゃっている。政治家は、エコノミストになっちゃいけないんです。市場原理に反対しないと。市場原理に任せちゃうと資源配分がうまくいかないようなところに、何とか配分するよう努力するのが政治家なわけでしょう。

その通りである。現実の政治はこうした当たり前の理屈から、はるかに隔たってしまった。

城内　今の改革は、要するに強い者がどんどん勝ち続ける。都市部の人たち中心で、地方の生活弱者、いわゆる過疎地に住んでいる方とか離島に住んでいる方々にとってみると、もうお先真っ暗です。

城内実は志を持つ。現実に失敗しながら、失敗したとは当人も感じていないし、周りも失敗者とも落伍者とも見ていない。爽やかな男である。



郵政法案に当初は反対していながら土壇場で賛成にまわった元同僚議員に対しては、「卑怯だとは思いません。その人はその人、私は私です」と城内さん。ただし、あのときの国会議員がとった行動に関しては、「今後きちんと総括されるべき」だと言う。（撮影／細谷忠彦）

みぞぐち・あつし
ジャーナリスト。1942年、東京都生まれ。
『中国「黒社会」の掟』（講談社＋α文庫）、
『仕事師たちの平成裏起業』（小学館）ほか著書多数。